

日本の歴史 60

『境界の日本史： 地域性の違いはどう生まれたか』

森先一貴、近江俊秀著（朝日新聞出版）

本書の請求記号 210.2 || Mor

稲垣宏行

明治初期の廃藩置県によって、三百諸侯と言われた「藩」が現在の「四十七都道府県」に変わったことはよく知られています。しかし本書は、この四十七都道府県に匹敵する「境界」の萌芽が後期旧石器時代から既に生じていたとしています。

文化庁文化財第二課文化財調査官の著者たちは本書を二部に分け、第一部では旧石器時代から縄文時代、第二部では弥生時代から古代を中心に論じています。日本の歴史を、従来のような日本一国からではなく、地域ごとの視点から描いています。

旧石器時代、世界は氷期という厳しい気候下にありました。海面は現在より100m以上も低く、北海道や瀬戸内海などは陸続きでした。人々は生活の糧を得るべく日本各地を移動し続けていましたが、後期旧石器時代後半期、現在の鹿児島湾北部に位置する始良火山噴火による環境変化が、その暮らしを大きく変えることになりました。

それ以前はナウマンゾウなど大型動物が主に生息していましたが、彼らに代わって中小型動物が中心となり、狩猟形態にも著しい変化が生じました。以前は大型動物を狩る石器を作るため、良質な石材を求めて遠隔地まで移動することもありましたが、その必要性が失われ比較的簡素な作りの物でも事足りるようになったことから、石器の形態が多様化したのです。

始良火山噴火以前、日本は平原の多い地帯でしたが、噴火の影響で針葉樹林が拡大するなど森林化が進み見通しの悪い場所が増えた結果、獲物に気取られる心配が少なくなり狩猟も容易になりました。また、寒冷な氷期から温暖期に入り気候が安定したことで、食料資源の摂取可能な時期や場所、資源の量も予測しやすくなりました。

これらの現象が、人々の定住化を後押しし、居住域を溝で囲む環濠集落が次々に築かれました。暮らしやすくなった環境によって人口も増加し、「境界」が日本各地に生じていく発端となっ

たのです。

弥生時代後期には定住化に伴い西日本各地で戦争が頻発しました。人口の増加によって食糧事情の問題や文化の細分化が生じたことも、これに拍車をかけました。こうして現れたのが、集団同士を調停出来る統率力の持ち主「首長」です。その中でも大和と河内（現在の畿内）の首長たちが突出した勢力を持っていましたが、彼らが周辺地域を纏め倭王権、後の朝廷へと成長していきました。やがて中国から導入された律令制度によって「国一郡一里」の三層の行政単位によって境界が政治的に固定されました。ただ、それとは無関係に出来上がったものもあります。前述の西日本と、東日本です。

発端は大海人皇子（後の天武天皇）が壬申の乱の際に東国の兵の力を借りたものの、彼らの精強さに危機感を抱き、交流を意図的に制限してしまつたことにありますが、その萌芽は弥生時代からあったと本書は指摘します。西日本に普及した稲作技術が、東日本に広まるまで100年も要したことから、その地の人々が西日本からの文化を拒んだと見ているからです。そしてそれは、地形や気候、資源などが異なる土地柄によって生まれた地域文化によるものと考えられます。

本書は従来の日本史と異なる視点から描かれており、特に旧石器時代から弥生時代にかけては専門的な記述も少なくなく、難解に思うかもしれません。しかし突き詰めれば、これらは地域に暮らす人々の知恵や必要性から生じたもので、我々の常識のみでも理解は難しくないと思受けられます。首長の登場や東日本との境界なども、元はそうした形から生まれたものです。そしてそれは日本史以外にも言えるのではないのでしょうか。本書を一読してそんなことも感じました。

いながき ひろゆき（司書・管理運営課）